孤児院を逃げ出して、すぐにこの仕事を始めた。フランベルは自分の見た目が良いことを知っていた。スワートを拾ってからも、続けている。他にできる仕事がないから。
裏から娼館に入り、割り当てられている部屋に入る前に、洗浄をこなす。尻穴に管を入れて、少しずつ水を入れていく。おなかが痛くなったら、尻から管を抜いて、尻から中身を専用の桶に入れる。
他にも洗浄をしている男娼がいたが、みんな無言で淡々と洗浄をこなしていた。
おっくうになるのもわかるが、まだ早い。本当に辛いのはこれからなのだ。割り当てられた部屋に行くと、うすっぺらい布とカーテン一枚で仕切られた、ヤリ部屋が左右に並んでいる。
既に割り当てられた布の上で待機している少年を横目に、フランベルは腰巻きを取って定位置に座る。フランベルの後にも何人かの男娼が部屋に入ってきたが人手不足で、この布分の人数の男娼が埋まることはない。だから、いつも、買春客は列をなしてやってくる。こなしてもこなしても終わらない。それが夜まで続く。
始業開始の銅鑼が鳴った。館長が客を限界以上に入れてから、銅鑼を鳴らすのだ。低いような高いような響くこのチャイムの音を聞くと、フランベルは具合が悪くなるようになった。
開始の合図と同時に、男たちが我先にとドアでぶつかり合いながら部屋に入ってくる。
フランベルは両肘を布の上において、尻を部屋の中央に向けて高くあげた。これが客を待つポーズだ。

〜〜〜〜　略　〜〜〜〜

自分を醜いというスワート。フランベルははじめはスワートに触れることさえできなかった。
孤児など珍しくないスラム街で、スワートを見つけたのはいつだったか。
寒暖差が少ない国で、一年中布を腰に巻いて暮らしているフランベルには季節感や時間の感覚に疎かった。それでも、スワートを拾ったときのことは覚えている。その少年は目立っていた。大勢いる孤児の中でも特段。それも全身に布を巻き付けていたからだ。見えるのは目と頭髪だけ。耳まできっちり布で覆われていた。
「お前、俺と来るか？」
話しかけられた少年はびくっと体を震わせて、フランベルを見上げた。正直言うと、フランベルは少年の真っ黒な瞳が少し怖かった。同時に惹かれもしていた。真っ黒だが陰鬱さは感じられない。キラキラしているでもないのに、気になった。
「僕といると、病気になりますよ」
少年は大人びた口調ではっきりと拒絶した。
「それは、その巻いている布と関係があるのか？」

「そうですよ！　僕といると、アンタのその綺麗な顔や体がボロボロに爛れますよ」
　布越しに口がパクパク動いているのを見るに、舌や歯に異常はなさそうだ。聞こえにくそうに見える耳に巻かれた布も外の音を聞くには問題ないように思えた。
「でも、最近ここに来たんだろ？　一人でいると、その布剥がされるかもしれないぞ」
　そういうと、少年はくちびるとぎゅっと噛んだ。どうやら経験済みのようだ。こんな小さなスラムの街で、新顔が現れたとなれば標的になるのは当然だ。それも布をぐるぐるに巻いたいかにも弱そうな病気の少年ならなおさら。
「剥がされるのが嫌なら、俺についてこい。隠れ家があるんだ」
　スラムにある建物はすべては違法だ。勝手に土地を使って勝手に建物を建てている。政府の浄化作戦でホームレスが一掃されることがあるが、何度掃除をしても沸いてくるのがホームレスだ。何度家を取り壊されても、施設に放り込まれても、なんとしてでも脱走して、違法に家を建てるのがスラムの人間というものだ。
　後ろを振り返りながら、隠れ家につくと、少年は距離を空けていたものの、しっかりついてきた。
　隠れ家で待っていると、少年はおずおずと中に入ってきた。
「適当に座れよ。そういえば、おまえ、名前は？」
「スワート・・・・・・」
「スワートか。俺は、フランベルだ」
「フランベル？」
　スワートは驚いたような声をだした。
「どうかしたか？」
「いや、兄と同じ名前だっただけです」
　スワートは目を逸らして言う。
「兄がいたのか」
「みんなの兄貴分でしたね。本当の兄弟じゃないです」
「じゃあ、俺も兄になってやるよ」
「どうしてそうなるんです？」
「スワートが悲しそうだったから」
「はあ、じゃ、よろしくお願いします。兄様」
　諦めたように流れでスワートはそう読んだのだろうが、その響きにフランベルの胸が高鳴った。

〜〜〜〜　略　〜〜〜〜
「あうんっ」

裏筋を舐められて、乗り気では無いといった感情が一瞬で吹き飛ぶほど、快感が全身を駆け巡って眠気が吹き飛んだ。娼館では味わったことの無い感覚だった。

スワートはおちんぽにちゅっちゅとキスを落としたあと、丸々と一気に根元までくわえこんだ。それだけで、おちんぽがぎゅううううとなった。スワートがぼろんと口からおちんぽを出す。